

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (261)

p - b

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところで話しています。

「その想像の原始日本語だと、濁音のバ行音に対する清音のハ行音が無声音だということになるのですね。」

「そう。bに対するpですから。」

ク グ ス ズ トウ ドウ ブ フ
「kとg、sとz、tとd、pとbが無声音と有声音の関係になるってことですね。」

「そう。シ ʃi の ʃ とジ ʒi の ʒ、チ tʃi の tʃ とヂ ɕi の ɕ、ツ tsu の ts とヅ ɕu の ɕ も、きれいに無声音と有声音の対応になっているの。」

「無声音と有声音って、声帯が振動しないかするかの違いでしたよね。」

「そう。声帯が振動しなければ無声音、振動すれば有声音。のど喉に手を当てて、k・gとかs・zとかやってやってみると、声帯が振動しないのとするのがすぐにわかるのよね。」

無声音	声帯が振動しない	k	s	t	p	ʃ	tʃ	ts
有声音	声帯が振動する	g	z	d	b	ʒ	ɕ	ɕ

声帯は喉の中央にある発声装置で、弾力のある二つの靭帯を収縮させ、肺から出される空気によって振動し、音を出します。

喉に手を当てて、例として

「クー、ゲー」

「スー、ズー」

「シー、ジー」

と交互に発声してみましょう。

ゲー、ズー、ジーのときは声帯が振動する (=有声音である) ことがわかります。

